信毎俳壇

今井　聖選

運動会昼の白線引き直す　（長野市）北沢　京子

ウォーキングして整ふや小春の身　（佐久市）岩下サク江

眉と紅引きて歌ふよ文化祭　（飯綱町）小林　紀子

信濃路の赤子顔なる椿の実　（坂城町）宮下　和夫

田仕舞の後の出で湯や遠浅間　（小海町）依田　久代

ガスの穂の青を強むる今朝の冬　（須坂市）丸山　英子

泥払ひつつじゃがいもを差し出す手　（佐久市）大井　悦子

初霜や安曇野大地押し上げて　（安曇野市）丸山　進也

薬袋はカタカナばかり花カンナ　（松川村）中野　重行

痛み止め二錠に頼る秋の雨　（岡谷市）吉池富貴勇

佳作

秋澄むや上田紬の機の音　（長野市）北沢　時江

鶺鴒は走るわたしは平社員　（塩尻市）神戸　千寛

選評　一句目、熱戦が続いて薄くなった運動会の白線を昼に引き直している。「写生」の眼が実に行き届いている。二句目、歩くことによって身体がすっきりする。人間の運動の基本である。「小春」もまさにその季節。三句目、少女は眉を描き唇に紅を引いて文化祭の壇上に立つ。生き生きした誇らしげな顔が見えるようだ。四句目、「赤子顔」という比喩が見事。信濃路も椿（つばき）の実も素朴で美しい。

神野　紗希選

葺取り戦争に似て次も欲し　（伊那市）中村　茂子

逆光の朝露数多ガザの民　（長野市）小池　秀雄

正当防衛過剰防衛オリオン座　（小諸市）加藤　陽介

月の闇星の闇あり落葉降る　（松本市）久我　綺乃

爆撃に潰れし病舎すがれ虫　（松本市）小林　幸平

月の雨書架に影ろふゴーリキー　（松本市）伊藤　和夫

身に入むや戦禍の子等の怯える眼　（佐久市）町田ゆかり

ガラス戸に（またたびあります）峡の店　（飯山市）小野沢竹次

もぎたての林檎ズボンで拭いた頃　（下諏訪町）中村　久

霜の朝製糸工場へ急ぐ母　（佐久市）角田行々子

佳作

蓼科を仰ぐ歩荷の背に秋刀魚　（佐久市）赤岡　厚子

冬隣世界地図から血の叫び　（佐久市）吉岡　道明

選評　一句目、戦争の根には素朴な欲望が。次も欲しい、もっと。葺（ふき）取りに結びつけ、戦争を人ごとと切り分けず対峙（たいじ）した。二句目、朝日の差す逆光に、露は陰影深く輝く。露は古来、はかない生の象徴だ。こぼれそうな一粒一粒がガザの人々の命だとしたら。三句目、神話のオリオンは狩人で、行き過ぎた勇猛が死を招いた。どこまでが正当防衛か、また過剰防衛か。イスラエルの「正義」に奪われる命を思う。

坊城　俊樹選

ユークリッド幾何など浮ぶ稲架の出来　（長野市）水木　朱美

ハロウィーン銃殺されし手にキャンディー　（須坂市）東島　雄二

親しきは草間彌生の南瓜かな　（飯山市）小野沢竹次

勾玉のほつれて落ちる神の旅　（上田市）竹内　創造

大根引き二股もあり蛸足も　（飯綱町）仲俣　一重

足首の褪せしミサンガ赤のまま　（松本市）滝沢征矢子

年輪を崩さず熾る炭火かな　（箕輪町）向山　政俊

我が影のまあるく老いて日向ぼこ　（安曇野市）丸山　進也

ポケットの隅に去年の木の実かな　（立科町）村田　実

光り舞ふ落葉松黄葉響き会ひ　（南相木村）猿谷　秀

佳作

ことごとく露置かれたる草の道　（佐久市）大井　悦子

秋うらら道の駅には猿回し　（佐久市）赤岡　厚子

選評　一句目、この幾何学が何なのか私はまったく分からないが、そう言われると稲束が正確に架けられた美しい稲の連続を思い出す。二句目、戦争俳句だがこの読後感がものすごく切ない。亡くなった子供が楽しみにしていたキャンディー。その映像が強烈で忘れられなくなってしまう。三句目、草間彌生の絵はとにかくポップでシュール。しかしどれも子供の漫画のような楽しさがある。